

考古学資料から言語共同体を読む

—古代東北北部の人々はアイヌ語古語を話したか—

Reading the Speech Community from Archaeological Materials :
Did People Lived in Ancient Tohoku Region Speak Archaic Ainu ?

Abstract

Speech community is a group of people who share a set of norms and expectations regarding the use of language. And the human beings form speech community. It can be said that this is a principle. Therefore it applies to it about not only the present but also the past people. In this paper, I tried to read the speech community from archaeological materials, especially of ancient times excavated in northern part of Tohoku and south Hokkaido, and examine it whether the people who lived in the area spoke archaic Ainu language. As a result, it was revealed that the people in south Hokkaido in the 7th century spoke archaic Ainu language, and that the people in north Tohoku at the same period spoke archaic Japanese language.

松本建速

1. 背景と目的

物質文化を資料とする考古学分野では、文字がない時代・地域の人々の言葉に関連する内容の考察は活発ではない。しかし人間は言葉を話す存在である。考古学でも言葉について考えることは大切であり、これまでもいくつかの重要な研究がある。C.レンフルーの『ことばの考古学』、P.ベルウッドの『農耕起源の人類史』では、新石器時代の人々の移住に伴う言葉の拡散について、広い視野で考察された（C. レンフルー1988、p. ベルウッド2005）。両著とも、農耕・牧畜というそれまでは各地に存在しなかった新しい自然の利用法が人間集団の移動によって地球上に拡散し、それ以前の利用法に勝ったために、定着しさらに拡大したこと、同時にそれが言語の拡散でもあったことを、考古学資料の組み合わせや分布状況に着目して説明した。妥当な説である。

日本考古学でも、北海道を舞台としたアイヌ民族とその祖先の考古学や（瀬川2015）、本州島東北北部の古代の人々が用いた言葉についての考察がある（工藤2000、松本2006・2013・2015）。アイヌ民族は現存し、アイヌ語は日本語とは別系統である。文献にも、現在のアイヌ語で解釈できる15世紀の人名も残され、考古学資料の連続性から考えて、それ以前

の古代の人々もアイヌ語を使用していたと考えるのが妥当である（瀬川前掲）。ただし、その祖先集団の一つだとも言われる東北北部の古代エミシの言語については諸説ある。

工藤雅樹は東北北部地域に存在していたと古代日本国の文献に記されている古代エミシについて、その人々が居住していたと理解されている東北地方、とくに北海道に近い東北北部地域に北海道に住むアイヌ民族の言語すなわちアイヌ語で解釈が可能な地名が多数あることをもとにして、人々はアイヌ語を話したと考えた（工藤2000）。これは言語学者金田一京助の、東北地方の地名とアイヌ語との比較をもとにした論（金田一1951）や、実地調査を繰り返してそれをさらに確実なものとした山田秀三の研究（山田1982など）を肯定して引き継いだものである。

筆者の論は、さきに言及したC.レンフルーの考え方を基本としている。7世紀に東北北部に突然出現したいくつもの集落について、その居住者が、馬を飼い雑穀栽培をおこなう人々だったことを考古学資料にもとづき論証し、その文化は古代日本国域の人々のものであるとし、それ以降の東北北部の居住者は当域からの移住者であり、日本語話者だったと述べた（松本2006・2013・2015）。これは、東北地方にアイヌ語で解釈できるアイヌ語系地名が存在する事実にもとづく、前述の金田一京助や工藤雅樹を代表とする、古代エミシがアイヌ語を話したとする説とまったく異なるものであり、しかも単なる思い付きを述べたのではなく根拠を明確に示したものである。議論があってしかるべきだが、残念ながらこれまで議論になったことはない。

ただし、古代の東北北部の人々は移住者であったという筆者の説に対して、それを否定する意見はある（八木2011）。だが松本が考古学で人間を語るさいに物質文化とともに必ず言葉についても考え、移住説の重要な根拠としているに対し、八木は言葉については語らず、十分に否定したことにはなっていない。言葉を話す存在である人間の移住を語る場合、直接言葉について触れることができない時代や空間を対象とした考古学であれ、言葉を重視しなければ、正確な考察は不可能なのだが、そのことがこれまでの論では伝えきれていなかったかもしれない。

そこで本稿では、ある地域に居住していた人間が、いかなる文化的特徴を持っていたかを考古学資料で考える場合でも、人々が用いた言葉を考察することが不可欠であることを、最初に明確にしておく。そのうえで、筆者がこれまでの論で用いてきた考古学資料を使い、古代エミシと呼ばれた人々のうち、東北北部に居住していた人々は日本語古語を話す移住者であり、北海道の人々はアイヌ語古語を話す人々であったことを改めて論証する。

ただし従来の筆者の説を単に編集するのではなく、新たに“言語共同体”という概念を用いて説明する。これを使って考古学資料を見れば、人間集団の性質をよりの確に読み取れるからである。しかしこれは考古学分野ではあまり言及されない概念である。そこでまず、この概念が用いられている言語学や文化人類学分野でそれがどのように扱われているかを説明し、考古学資料から“言語共同体”を読み取る方法を述べ、それにもとづいて本稿を進めることとする。

2. 言語共同体

(1) 概念

人間は言語共同体¹⁾を形成して暮らしている。脳や身体構造は人類誕生以来不変だと考えられるので、これはおそらく人類が始まって以来変わらない人類の特徴である。言語学では、ある言語の話者がその言語について集団的に共有していると考えられる言語的知識のことを、その言語のラング (langue) と言い、ラングを知識として共有している話者の集団を言語共同体 (speech community) と呼ぶ (風間ほか 2004)。したがって言語共同体と呼ばれる集団の実体にはかなりの幅がある。同ジャンルの専門用語を駆使する集団、同じ方言を話す集団、ある言語を話す「国」に別の言語を話す「国」から移り住んだ移民の集団、母語が同じだと認識している集団など様々である。共通しているのは、ある人々がその言葉によって自分たちの意思をなにに不自由なく伝え合える、そんな言葉を共有している社会、それが言語共同体だということである。

さきにも述べたように、言語共同体と一口に言っても共通している言語の状態としては、狭いものでは「専門用語」「世代の用語」「方言」「移民の出身国の言語」、広いものでは「母語」というふうに多様である。本稿で問題にするのは、「方言」「移民の出身国の言語」「母語」のあたりであるが、これらは、共同体どうしに境界を生むことになる言葉でもある。ただ、その境界の社会的状態は、人口規模、社会構造等によって様々である。実態としては、たとえば青森県内の東西地域で使われる南部弁と津軽弁のように、アクセント、言い回し、固有名詞等に明確な違いはあるが、意思の疎通は十分にできる「方言」、日本列島上の本州島北端と九州島南端といった遠く離れた地域の津軽弁と鹿児島弁のように、どちらも「日本語」であることはすぐにわかるが、少し聞いただけでは意思の疎通が困難だと感じるほど違う「方言」、文字にして音韻の変化を説明されれば両者とも「日本語」の系統であることは理解できるが、聞くだけの通常の会話ではまるで理解しあえないと感じる琉球地域の「うちなーぐち」とそれ以外の「日本語」、アメリカ合衆国での様々な移民のように、公用語としての米語を話すアメリカ国民ではあるが、別々の母国由来の言葉をシンボルとしてそれぞれ持っており、明瞭の境界で区域分けするわけではないが、チャイナタウン、コリアンタウンのような集団が集う場所が生まれる場合、そして、国境線を明瞭に持つ「国家」のようなものもある。あるいは、トルコ、イラン、イラクの3つの「国家」にまたがる山岳地帯に住む人口2,500～3,000万のクルド人 (民族) のように、それだけの人口でありながらそれぞれの居住する「国家」では少数民族と認識される人々がいる (21世紀研究会 2006)。人々はクルド語を話しており、このような集団も一つの言語共同体である。

最初にも述べたように、人間が言語共同体を作るのは、時間や空間を越えた人類普遍の現象なのだが、単なる無意識的な自然現象ではなく、意識的な文化的・社会的な側面も持つ。一人の人間がどの言語を語り、どの言語共同体に属そうとするかについては、絶対的にあらかじめ決まっているわけではないし、「言語」「民族」「国家」の3者の関係についても可変的である。しかし「言語共同体」概念と「民族」「国家」の関係については、19世紀から20世紀にかけて、

そこに「神秘的なつながり」を考えた歴史もあり注意が必要である。それについては、関連論考を通史的にたどる田中克彦による丁寧な考察があるので（田中 1975）、ここではそれを踏まえながら、とくに本論と関わりのある“民族”と言語共同体との関係に焦点を絞って少し述べておく。

20世紀以降の言語学の理論や人文諸科学に広い影響を与えたスイスの言語学者フェルドナン・ド・ソシュールが解説したその内容を次に示す。ソシュールは1906～1911年にジュネーブ大学で一般言語学講義を担当し、そのなかで *communauté linguistique* という概念を説明した（F.D.ソシュール 1916 [小林英夫訳 1970]）。英語訳では *linguistic community*（Baskin 1959）、日本語訳では「言語社会」「言語共通性」（小林英夫訳 1970）と「言語共同体」（田中克彦 1978、町田 健訳 2016）とされている。「言語共同体」という用語の英語表現は、現在では *speech community* が一般的であるが、語られている内容に違いはないので、ソシュールが語ろうとしたのは今日の実用語でいえば「言語共同体」でよいことは田中（1975）で十分に考察されている。また、同書によればこの用語はドイツでは *Sprachgemeinschaft* として 1830 年代以降に定着していたという。

ソシュールの『一般言語学講義』から言語共同体に言及する箇所を引用する。第 5 部第 4 章「人類学と先史学での言語の証拠」第 2 節「民族体」のなかで語られている。「民族的統一性は、言語共同体の二次的な要素でしかなく、しかも必要な要素では全くない。しかし、それよりもはるかに重要で、唯一本質的な別の単位がある。それは、社会的な結びつきによって構成されている単位であり、これを“民族体”と呼ぶことにする。社会的な結びつきは、言語共同体を創造する傾向にあり、共通の固有語に一定の特徴を刻印する。逆に、民族的単位を何らかの方法で構成するのは、言語共同体である。一般的には、民族的単位を考慮すれば、言語共同体を説明するのにはいつも十分」である（F.D.ソシュール 1916 [町田訳 2016]：308 頁）。そして、これに続けてソシュールは、例として古代イタリアにローマ人と隣接して住んでいたエトルリア人のことを語る。ローマ人とエトルリア人の違いがもっとも端的に現れるのは言葉だと説明し、「エトルリア語を 4 行読めば、この言語を話していた民族が、ラテン語を話していた民族群とは全く異なっていたことを十分証明できる」（ソシュール前掲：308 頁）と述べた。最近の研究によれば、エトルリア人が暮らしていた紀元前 8 世紀～紀元前 5 世紀のイタリア半島には 6 つ以上の複数の言語が存在しており、エトルリア語を含む非インドヨーロッパ語がイタリア半島の北半に、半島の南半にインドヨーロッパ語の諸語があった（マッシモ・パロッティーノ 2014）。

（2）言語共同体と“民族体”

ソシュールは「民族的単位を何らかの方法で構成するのは、言語共同体である。一般的には、民族的単位を考慮すれば、言語共同体を説明するのにはいつも十分」だと述べた（F.D.ソシュール 1916 [町田訳 2016]：308 頁）。そして言語共同体を説明するのに、さらに“民族体” *ethnisme* という概念を用いた。この用語は小林英夫による翻訳では“民族性”と訳され（F.D.ソシュール 1916 [小林訳 1970]）、英語訳では *ethnic unity* となっている（F.D.ソシュール 1916 [tr. W. Baskin 1959]）。“民族性”という用語は、現在では *ethnicity* の定訳となっているので、本稿で

はソシュールのethnismeの訳としては“民族体”（F.D.ソシュール 1916 [町田訳 2016]）を用いる。

ソシュールによれば“民族体”とは、「社会的な結びつきによって構成されている単位」であり、「宗教、文明、共同防衛などの多種多様な関係に基づく単位で、異なった人種に属する民族の間でも、どんな政治的結びつきもない場合でも、作り上げられる」ものである。逆の言い方をすれば、どんな場合でも、まず共通した言葉を話す人々による共同体、すなわち言語共同体ができあがり、それを“民族体”と考えることができるというのである。ただし、ソシュールのさきほどの解説のなかにあった「人種」という概念は、19世紀後半～20世紀前半当時は通用していたが現在の生物学では用いられないので（B. ジョルダン 2008）、「異なった人種に属する民族」という表現は、ここでは単に「異なった民族」と理解しておく。“民族体”は、異民族どうしても成り立つ「社会的な結びつき」による単位だと説明されていることが非常に重要である。

またソシュールは、単純に民族＝言語共同体だと説明しているのではない。第一に大切なのは、まずは共通した言葉を話す人々が集まるということである。最初に“民族”があるのではなく、どういう出自であれ言語を基本として集まった人々を、結果として“民族体”と理解しているのである。絶対的・客観的に他と区別できる属性を持つ“民族”という集団があるのではなく、そこに集う人々の帰属意識を重視するのが今日的な“民族”に対する知見だが、ソシュールの考え方はそれに近い。1848年の憲法でドイツ語、フランス語、イタリア語を国語としたスイス国民であったソシュール²⁾にとっては、そういった理解は当然だったのかもしれない。

なお、言語が“民族”のアイデンティティを支える重要な要素だというのは最近の言語学の概説書には必ず書かれている（佐久間 2013、田中・田中編著 2015 など）。言語学では、例えばアイヌ民族にとってはアイヌ語が、日本民族にとっては日本語がアイデンティティの源であると理解されるのである。また、文化人類学分野では 1960 年代以降、エスニシティ（民族性）をめぐる議論が活発化するなかで、“民族”の再定義や民族境界について論じられてきたが、20 世紀後葉にそれらをまとめた論考では、言語が集団のシンボル、そして帰属意識のよりどころとなり、集団の境界の標識にすらなると語られている（庄司 1997）。もちろん人間はどんな言葉でも話せるようになる能力を持っており、環境・状況しだいで一人の人が話す言語を変えることができる。したがって、個々人の意識によってそれぞれが属す集団を自ら決めることができ、不同の絶対的な民族と言語の関係があるわけではない、そこは強調しておきたい。

それでも、人間が自分の属する集団を決めるときに重視するのは言葉である。言語人類学者 R. バーリングは、複雑な民族移動と相互交流をする高地ビルマの山岳地帯に住む 2 つ以上の言語を話すことができる人々を紹介しながら、それでもそれらの人々は自分の第 1 言語として一つの言語を難なくあげると記している（R. バーリング 1970）。人間は自分の属する社会を自ら決める傾向があり、そのさいには言語をシンボルとして重視することがわかる。

以上に見てきたように、“民族体”、“民族”といった用語、あるいは概念は、人間がごく普通に暮らす場合、ごく自然に言語共同体を形成してしまうという事実由来している。ただし、もう一度述べておくが、言語共同体という概念は、単に、共通した言語を持つ集団のことであ

り、小さなものから大きなものまであり、そのすべてが“民族体”や“民族”として括られるものではない。それでも、人間が自然に言語共同体を形成してしまうこと、これは時代や地域を越えた人類の特徴だということを繰り返しておく。

3. 考古学資料から言語共同体を読む方法

(1) 人間と言語

前節で、簡単にではあるが、言語学による言語共同体についての理解、そして文化人類学も加えて民族と言語の関係についての学問的理解を述べた。そこで引用したソシュールの講義が“一般”言語学だったことからわかるように、述べられた内容は時代や地域によって限定される性質のものではない。さきに見た人間と言語との関係は、個々の言語の性質ではなく、人間が言葉をどのように「使う」という「能力」に関わった部分である。“文化”のなかでも特定・個別のものではなく、人間の自然的部分との両面を持った部分であり、普遍的であり、「原理」と考えて差しつかえない（図1）。すなわち、考古学で扱う資料のように、文献記録もなく、現存する人々や文化との連続性などが不明な場合であっても、その文化を残したのが人間であるという、ただ一点の共通性があれば用いることのできる「原理」だということになる。

人間と言語との関係の原理的な部分のうち本稿に関わりのある2点をまとめる。原理①：人間は言語共同体を

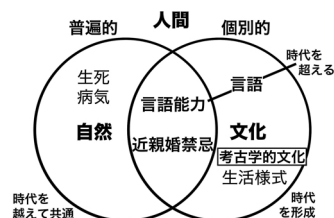


図1 人間における文化と自然

形成する。原理②：人間は言語を集団のシンボル、また、帰属意識のよりどころ、さらに、集団の境界の標識にする。そして、これらの2つの性質を人間が持つがゆえに、言葉の通じない集団どうしで人々の交流があったとしても、互いの言語を理解できるようにならないうちは、浅い関係しか持てない。逆に、言語共同体を形成している人々の間では、非常に深い理解、緊密な交流が可能となる。そういった人間の交流の結果が物質文化の外観的特徴や分布状態に現れることになり、物質文化の持つこのような特徴を理解していれば、文字資料のない時代・地域を対象とした考古学でも言語と人間について考察できるのである。

(2) 考古学資料から言語共同体を読む方法

人間と言語との関係の原理①にもとづけば、日本列島上で文字記録を残さなかった時代・地域の1つの集落遺跡は1つの言語共同体ということになる。そしてその集落遺跡出土の様々な物質文化の組み合わせはその言語共同体を構成する一人ひとりの人々の持つ文化要素の集まりである。したがって、集落遺跡ごとの物質文化の組み合わせを比較すれば、同じ言語共同体に属する人々の分布域を括ることができる。そして物質文化の組み合わせが異なる集落遺跡群どうしでは、原理②にもとづき、言語共同体が異なっていることになる。

したがって、考古学資料をもとにして言語共同体を読み取るための基本的な方法は次の2つとなる。①人間の生活一般を示す集落遺跡を対象として、1年を通じての基礎的な活動内容がわかる出土遺物の組み合わせを抽出する。②物質文化の組み合わせの類似度や各種物質文化の

形態・製作技術等の類似度を見て、言語共同体を同一とするか異なるとするかを決め、そして「同一」の場合でも、関係の遠近はあるので、物質文化の組み合わせのあり方やそれらの形態・製作技術等の類似度からそれを読み取る。

なお、集落は、集落地理学的定義では、人類の共同生活の単位をなす家の集まりの総称である（矢嶋 1957）。したがって、一般には1つの住居だけが単独で存在しているようなものではなく、複数の住居が集まりその居住者たちが相互に関係し合って暮らしている住居群という構成となる。だが、発掘調査では当時の居住域全面が調査されるわけではなく、調査の都合で住居跡が1棟しか調査されない場合もあるので、本稿では遺跡が存在する区域の地形を考慮して、住居跡が1棟しか検出されていない遺跡でも複数の住居が存在したと考えられるものは集落遺跡と判断した。また住居跡が未検出でも、土器片が出土していたり墓が見つかったりする地域には人々が居住していたことになる。連続した別世代の墓も集落を示す可能性はある。しかし住居跡が発見されない場合、住居群を形成した集落遺跡は未発見であり、それは人々の居住形態が異なり生活様式や文化の違いを示すことにもなるので、本稿では集落遺跡があったとは判断しない。

また、いかなる遺物・遺構も出土していない場合についても集落はなかったと判断する。ある時期の集落遺跡が立地するその場所や、それを含む100km四方ほどの広範な地域に、それ以前の時期の集落遺跡がみつまっているにもかかわらず、ある数世代分の時期だけ集落遺跡が欠落し、その後再びその存在が認められる場合も、その集落欠落時期については、今後発見される可能性があるとして不明や判断保留とするのではなく、集落遺跡は存在しないと判断する。考古学では存在しないと切り切るの難しいが、本稿で対象とした地域では、遺跡の分布調査も、旧石器時代以降の堆積層をむらなく調査している緊急調査も相当な面積で実施されており、そのような状況下での判断として、ある時期の集落が存在しないと述べるのは科学的判断である。

（3）本稿で用いる資料

対象とする時期は3～11世紀、空間は東北北部から北海道南部とし（図2）、集落遺跡、墓遺跡出土の全遺構と全遺物を資料とする。ただし第1節の目的の部分で述べたように、本稿では考古学資料から言語関連の要素をより適切に読み取る方法の提示やその結果を示すことを第一の目的としている。そこで、これまで筆者の論文で何度も使ってきた、性質がよく知られ、評価が定着している既発表データを用い、その内容を再確認しながら編集して提示する。したがって、遺跡数は最新の結果ではないが、2020年3月刊行までの報告書類には目を通し、遺跡の有無の傾向に大きな変化がないことは確かである。

なお、筆者がすでに公表してきた論文は東北北部を扱ったものが多く北海道南部のものは少ないので、本稿で扱うデータや図にも後者の例が少ないことになるが、本文の解説に支障がないよう、記述で補った。

4. 結果

（1）集落遺跡

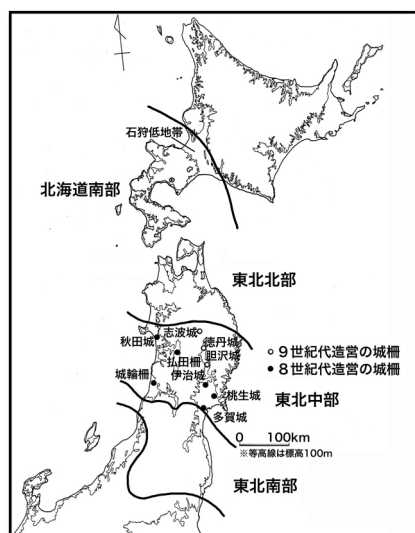


図2 北海道南部と東北北部の位置

【3～5世紀前半】3世紀～5世紀前半まで東北北部には集落遺跡がないので図3には示していない。ただし後北C₂・D土器・北大I式土器が数点出土した遺跡は複数あるので、この地域で人々が活動していたことは確かであり、人間であるから、雨風を防ぐために屋根のある状態の居住スペースを持っていたではあろう。それが恒久的な頑丈な建築物だったか否かは不明である。また出土している土器片の数も数十点にも満たない場合がほとんどであり、物質文化の組み合わせも、非常に限られたものである。ただ、後に述べるがこの時期の墓がいくらか発見されており、複数の人々の居住はあったことになる。しかし、集落とは評価できない。

北海道南部には後北C₂・D式土器の時期の竪穴住居が千歳市末広町遺跡で出土している（千歳市教委1985）。集落があったと考えてよい。

【5世紀後半～6世紀】東北北部では（図3-1）八戸市田向冷水遺跡からカマド付竪穴住居が、古墳文化の文化要素を伴って複数検出されている。東北北部の集落遺跡はこの1例だけである。おいらせ町中野平遺跡では5世紀中葉ごろに古墳文化地域で生産された石製模造品が出土している。これらの例以外には土師器、続縄文土器とも、土器片すら出土していない。

一方、北海道南部では恵庭市西島松5遺跡のように、石狩低地帯に大規模な墓域があった（北海道埋文2002）。この時期の住居は見つかっていないが、継続して数代にわたり墓域を営んでおり、人々の居住があったとがわかる。

【7世紀～8世紀】東北北部ではその東側にのみ、7世紀の前半にいくつかの集落が突然誕生し、その後さらに増加した（図3-2）。2011年段階の統計では図4に示したように、6世紀後半にはゼロだったのに突然5つの集落が出現し、7世紀後半には21の集落数に急増した。

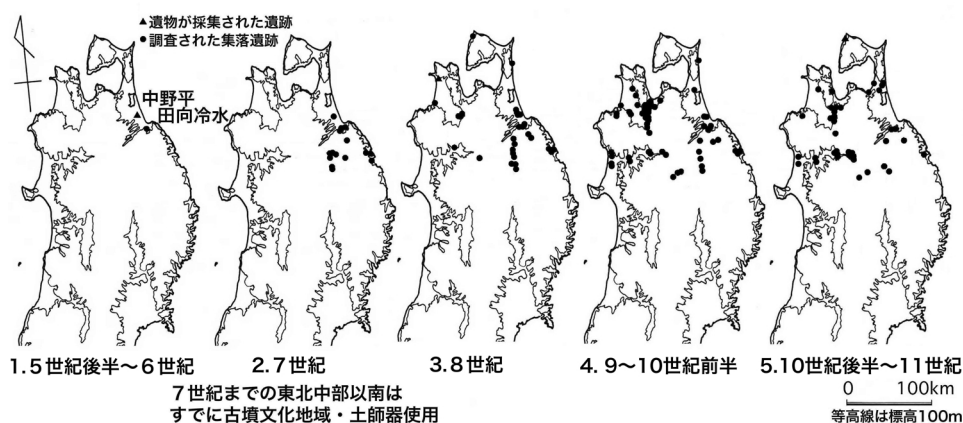


図3 東北北部の集落遺跡分布図

松本（2011）第13図を基本に、青森県教委（2016）大館市教委（2014）を加えて作成

増加率は下がったが、集落増加の傾向は8世紀後半まで続き、その時期には東北北部の西側にも少しずつ集落が出現する（図3-3）。

北海道南部でも7世紀の末葉～8世紀前葉に渡島半島、石狩低地帯でカマド付竪穴住居や土師器を持つ集落がいくつか出現し、8世紀後半には安定的に集落遺跡が増える。

【9世紀～10世紀前半】東北北部では、その西側に爆発的に集落が増加したのがこの時期である（図3-4）。2011年の統計では図4に示したように、9世紀前半に12遺跡だったのが、9世紀後半には3.3倍の40遺跡に急増した。東側でも徐々に増加した。

北海道南部では9世紀前半の遺跡はあまり知られていないが、9世紀後半以降、安定的にこの時期の集落が出土している。

【10世紀後半～11世紀】前時代に引き続き、東北北部全域に集落はあるが、10世紀前半までの集落が続く例は少ない（図3-5）。10世紀後半に造営された集落が11世紀まで続く例は多い。

北海道南部でも、10世紀前半まで同一地域に集落が営まれる例が多い。

（2）墓遺跡

【3～5世紀前半】北海道南部と東北北部に類似した形態・規模の土抗墓が作られていた。

【5世紀後半～6世紀】北海道南部には前時代と類似した形態・規模の土坑墓が作られていたが、東北北部では知られていない。

【7世紀～8世紀】北海道南部には恵庭市西島松5遺跡を代表とするような、前時代と類似した形態・規模の土抗墓が作られていたが（北海道埋文2002）、東北北部の東側に7世紀に多数の末期古墳が突然営まれるようになった。東北北部にはこの時期、同時代の北海道南部に作られた土抗墓は作られていない。

8世紀後半には東北北部西側の奥羽山地寄りの丘陵地に、末期古墳が初めて造られた。同時に北海道南部の石狩低地帯に北海道式古墳と呼ばれる末期古墳に似た墓が作られた。

【9世紀～10世紀前半】東北北部では墓はあまり発見されなくなる。ただし当該地域の東側では末期古墳が造営された地域に円形周溝墓と呼ばれるタイプの墓が営まれる。西側の一部にも円形周溝墓は営まれた。北海道南部、石狩低地帯では9世紀前半まで北海道式古墳が営まれたが、その後、その形態の墓は見られなくなる。

【10世紀後半～11世紀】北海道南部、東北北部とも、集落が多数あるので多数の墓があるはずだが、東北北部の西側、集落内に単独で住居床下に埋葬される例などが少数ある程度で、墓域を形成する墓は発見されていない。

（3）物質文化の組み合わせ

東北北部から北海道南部の3世紀～11世紀にかけての様々な遺跡から出土した遺物・遺構をもとに、3地域の文化要素の変遷を示したのが図5である。

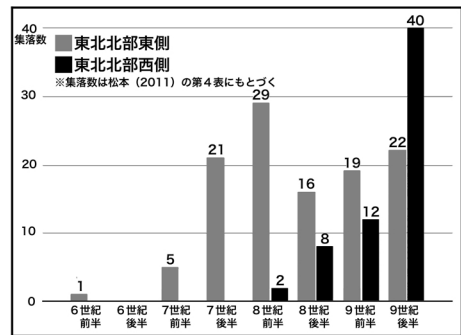


図4 東北北部の集落遺跡数 6～9世紀

【3～5世紀前半】図5に示したように、3世紀～5世紀前半まで東北北部からは竪穴住居跡は見つかっていない。

【5世紀後半～6世紀】5世紀後半～6世紀前葉の竪穴住居跡が東北北部東側の八戸市田向冷水遺跡（八戸市遺跡調査会2001、八戸市教委2006）から見つかった。古墳文化地域の土師器（坏・甕・甗）を伴う、カマド付竪穴住居が検出され、石製模造品も出土した。石製模造品も古墳文化の文化要素である。当遺跡では墓はみつからない。しかしその後6世紀いっぱい、東北北部ではどこからも竪穴住居だけでなく、土器片すら見つからない。

【7世紀～8世紀】東北北部の東側にのみいくつかの集落が突然誕生

したのだが、竪穴住居跡が継続して作られるようになるのは7世紀以降である。竪穴住居にはすべてカマドが附属している。同時にカマドで使われるタイプの土師器の長胴甕・甗が出土するようになった。他に、土師器には坏・高坏・甕がある。カマド＋土師器長胴甕＋甗は、雑穀栽培等の農耕があったことを示す。数は少ないが須恵器も伴う。末期古墳から轡や杏葉が出土しており馬も飼われていた。

8世紀には東北北部の西側や北海道南部にもカマド付竪穴住居を持つ集落が出現した。物質文化の組み合わせは、7世紀の東北北部東側と同様である。ただし、北海道南部の場合、カマドだけでなく、住居中央に地床炉が作られる竪穴住居があったり、土師器表面に横走沈線が刻まれたり、前時代からの技術との融合も見られる。

【9世紀～10世紀前半】東北北部全域に集落が増加した。とくに西側に多数の集落が急増したのだが、水稻耕作が可能な平地に近い一段高い台地のうえに営まれる例が多く、稲作を目的とした立地だと読み取れる（松本2006）。9世紀に突然出現した集落はすべて、それ以前に誰も住んでいなかった土地に営まれた。すべての文化要素が、その土地に初めて登場したものであった。漁労用の網に付けられる管状の土鍾がこの時期に、東北北部西側の河川付近の集落で用いられるようになった。これは7～8世紀の東北北部東側の集落からは出土していない道具である。ほかにこの時期に東北北部西側に持ち込まれた技術として、製鉄と須恵器生産がある。これらも7～8世紀の東北北部東側の遺跡には持ち込まれていない。一方、この時期に東北北部全域に持ち込まれた技術もある。文字の使用である。それを示す道具が硯である。それ



図5 東北北部～北海道南部の文化要素の変遷3～11世紀

には墨と筆が伴い、文字が書かれたことになる。表面に文字が墨書された土師器や須恵器が東北北部全域から出土している（青森県史編さん古代部会2008）。板に文字や記号が書かれる例もある（青森市教委2013）。

一方、北海道南部から硯は出土しない。また、製鉄、須恵器生産も見られない。管状土錘もない。そこでは、9世紀後半になると、器表面に沈線で幾何学的な文様が描かれる刻文の擦文土器が作られ土師器的外観から遠ざかった土器が主流となった。

【10世紀後半～11世紀】この時期の集落の物質文化は、10世紀前半のものを踏襲している。

4. 考察

（1）物質文化と言語共同体

人間の活動とともにある文化には、そのまま考古学資料となる物質文化だけでなく、目に見える形として捉えるには工夫が必要な精神文化や思想・思考、そして農耕・牧畜・漁労といった様々な行為・活動、すなわち生業や生活様式などが含まれる。そこでここでは「物質文化の組み合わせ」や「物質文化組成」という表現ではなく、それらすべてを含めて「文化要素」と記した。ただし、例えば生活様式は物質文化の組み合わせとして捉えることができるし、思考や思想についても、物質文化の組み合わせや自然環境と物質文化の組み合わせ、位置・配置などを考慮することによってある程度捉えることが可能である。ただし、このような方法で捉えられるのは、生活様式、行動様式、思考様式といった一般化できる「様式」であり、「枠組み」である。

文化の定義としてよく引用されるエドワード・タイラー E.Tylor による文化についての解説に、文化の担い手は「社会の一員としての人間」だとある（E.Tylor 1871）。文化的活動をおこなうのは一人の個人であるが、その人は必ずある社会に属しており、社会共通の物質文化を使った場合の活動や思考には、社会共通の部分がある。物質文化の面では、例えば“民族衣装”や“民族料理”、そしてそれらに関連してその製作に特有の道具類が伴う。形に残らない活動や思考に関連しては、民族に特有の“慣習”、“言語”、地域社会に特有の“方言”などがある。

このように、文化を支える要素に“言語”がある。これは人間社会を考えるうえで省くことができない非常に重要な要素である。物質文化の組み合わせによって把握する考古学的文化を考えるさいにも“言語”は重要である。どんな人間も“社会”の一員として存在しているからである。そして共通の文化を持つ社会は、言語の側面から見れば“言語共同体”ということになる（本稿第2節参照）。考古学資料、すなわち物質文化を用いて“文化”を説明するならば、物質文化の共通の組み合わせを持つ社会は、一つの言語共同体だということになる³⁾。

（2）東北北部と北海道南部の古代の言語共同体

図5を下敷きに東北北部と北海道南部の古代の文化要素から言語共同体を読み取り、図6に示した。3～5世紀前半の東北北部と北海道は文化要素全体が共通なのだが、婚姻など様々な面において交流が深かったのであり、一つの言語共同体だったと理解できる。だが、東北北部では5世紀後半～6世紀にかけて遺跡が見当たらなくなり、北海道と同一の言語共同体も消え

る。5世紀後葉～6世紀前葉に八戸市田向冷水遺跡として局地的に集落が出現するが、この居住者の持ち物は北海道の人々と同じ言語共同体には含まれず、古墳文化地域の言語共同体に入る。

一方、北海道では土器や生業といった日々の生活の基本的活動を支える文化要素だけでなく、墓の形態も一度も途切れることなく連続している。土器には、8世紀に土師器の影響が見られ、器表面の文様が少なめになるが、その後9世紀後半には器表面に刻文を施す擦文土器が確立し、土器表面に文様を描くという縄文文化から続く慣習が存続していることが明確になった。それに対し、同時代の東北北部の文化要素はどれもが違っており、北海道での言語共同体は前時代から連続しているが、東北北部のものと異なっていたと理解できる。

北海道の言語共同体の人々は、3世紀から11世紀に至るまで、アイヌ語古語を話していたと考えられる。それは次のような理由からである。15世紀の渡島半島南部の沿岸地域には日本語話者たちも定住していたのだが、1457年に在来の民コシャマインらとの戦いが起こったという記録がある（海保1987）。「～アイヌ」という名は近世以降のアイヌ名によくある。中世以降の北海道に居住していた在来の人々はアイヌ語を話していたことがわかる。

図7に時代ごとの文化と推定される言語の変遷を模式的に示した。本州島には7世紀半ばから8世紀半ばの和歌を集めた『万葉集』があり、7世紀に日本語古語が話されていたことがわかる。当時、遣唐使は中国から倭人と認識されていたが、『三国志』「魏志倭人伝」のころ、すなわち3世紀、弥生時代後期、卑弥呼の時代から続く。し



■ 縄文文化およびそれに直接後継する文化 ■ 古墳文化およびそれに直接後継する文化
▲▲ 古墳文化または縄文文化に後継する文化(一時的) 未発見 (松本2011、瀬川2012、道庁報告書にて作成)

図6 文化要素の変遷と言語共同体 3～11世紀

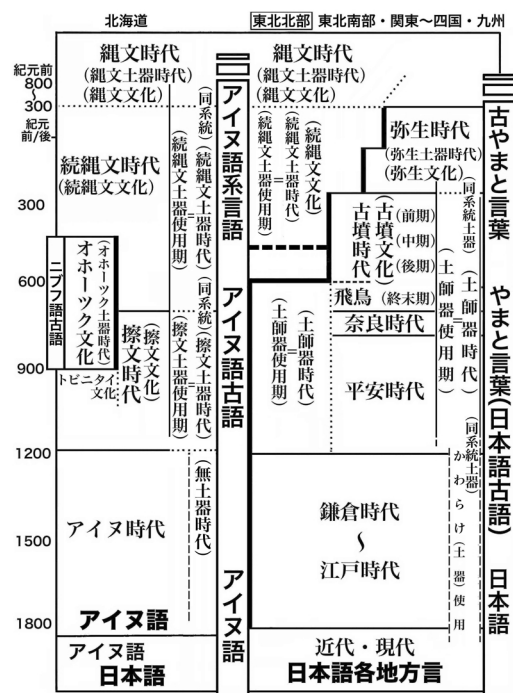


図7 時代ごとの使用言語の変遷

たがって、本州島の、弥生後期文化、古墳文化、古代日本文化・・・と続く地域での使用言語は日本語の系統であり、同一の言語共同体だったと考えられるのである。

北海道には近代以降に日本語話者が多数入植し、21世紀現在、日本語の言語共同体が主流となっているが、アイヌ民族を中心にアイヌ語+日本語の言語共同体もある。中世から近世にかけては、渡島半島南部に和人地や松前藩があったので、日本語とアイヌ語の2つの言語共同体があった。アイヌ文化期よりも前の時代についての正確な文字記録はなく、考古学資料で縄文時代晩期ごろからの文化変化を示すと図7のようになる。縄文文化の次にはそれを基本とした続縄文文化が続き、古代日本文化やオホーツク文化を取り入れながら続縄文文化を基幹とする擦文文化が13世紀ごろまで営まれ、その後、アイヌ文化となり、15世紀には前述のコシャマインという人名が記録された。北海道全域の言語共同体で、アイヌ語から別言語への言語置換が起きるような大人数による移住は、近代になるまでなかった。

なお、現在から1,000年も前の言語は日本語の場合、日本語古語あるいは「やまと言葉」と呼ばれる。同時代の擦文文化やそれ以前の続縄文文化期の言語も現在のアイヌ語を基準にすれば「アイヌ語古語」とすべきであろう。この時期の北海道に居住した人々は「アイヌ語古語」を話す言語共同体の人々だったと記しておく（図6）。

図6で7世紀の北海道南部を見ると、それ以前の文化要素の組み合わせを継続しているが、東北北部東側はそれ以前とはまったく別の文化要素の組み合わせである。この時期の両地域にはそれぞれ別の言語共同体があったと理解できる。前者は、前時代に引き続きアイヌ語古語言語共同体だが、後者の文化要素は日本語古語が話されていた地域のもと同じであり、日本語古語言語共同体ということになる。

（3）文化要素の通時的・共時的側面と言語共同体

以上に見た2つの言語共同体について、文化要素の通時的・共時的側面との関係を見る。第4節図3として示した東北北部の集落遺跡の分布状況の時期的変遷からわかるように、当該地域は7世紀になるまでの数世代間、集落が存在していなかったのだが、7世紀になると東側地域だけに集落が突然出現した。そして人々が持っていた文化要素は、雑穀栽培や馬飼をおこなっていたことを示し、それ以前にはこのあたりに存在していなかったものである。しかも、5世紀前半までのこの地域と同じ言語共同体であった北海道南部の文化要素とはまったく違っている。

これを東北北部の文化要素の通時的変化として見れば、6世紀と7世紀との間に異文化の要素の組み合わせが突然出現したのであるから、7世紀になって質の異なる大変化があったことになる。そこで共時的側面の観察として、5世紀前半までの時期には同じ言語共同体を形成していたはずの北海道南部に目を転じ、当地の同時代の文化要素と比べると、そこでは馬も飼育われず、雑穀栽培もされず、カマド付竪穴住居もなく、使われている土器の種類も異なっている。7世紀には、両地域の人々の文化は、完全に異質の文化となっていたのである（図6）。

7世紀に東北北部の東側に突然出現した集落は、北海道南部の言語共同体には加わらない人々によって営まれていた。文化要素から見れば、その人々が属していた言語共同体は、東北中部（図2）よりも南にあった終末期古墳文化、すなわち7世紀半ばから8世紀半ばの歌が載る『万葉集』で代表される日本語古語（やまと言葉）を話す人々によって形成されていたものだった

と読み取ることができる（松本2006・2018）。

一方、同時代の東北北部西側に集落は無く、どんな遺跡も見つかっていないのだが、8世紀になると農耕をおこなう人々が住む集落が徐々に出現した。ただ、それらのどの遺跡にも7世紀以前の土地利用の形跡はない。東北北部の西側には、8世紀になるまで農耕をおこなう人々がいなかったことになる。8世紀に突然新来の人々が訪れて集落を営んだのである。文化要素から考えるならば、人々は古代日本国領域の農耕文化地域から来たのであり、日本語古語を話す言語共同体を形成していたはずである。

（4）人間の移住と言語共同体：古代東北北部の人々はアイヌ語古語を話したか

古代の東北北部の居住者は、従来、古代日本国が『日本書紀』『続日本紀』等にエミシと記した民だと理解されてきた。それらの文献と考古学資料や東北地方の「アイヌ語地名」の存在も考慮して、その居住者は弥生・続縄文時代以来の在来の民であり、アイヌ語を話していたと考えられてきた（工藤2000、熊谷2013など）。古代の文献に即して考えるならばその考えは素直な結果に思える。しかし、考古学資料を用いれば、さきに述べてきたように東北北部の人々は日本語古語を話していたことになり、従来の考えは成り立たなくなる。

ただし、東北北部の東側の7世紀に突然出現した集落は移住者のものではなく、在来の人々が古墳文化を受容したという解釈がある（八木2011）。土師器の形態や製作技法、末期古墳の構造に在来の要素があるというのを根拠にしている。そしてその考えに立てば、居住者は続縄文文化期以来の在来の民の末裔であり、アイヌ語古語の言語共同体に属することになる。

しかし本稿で述べてきたように、6世紀の東北北部には在来の民がおらず、文化を受容する人がいない。したがってそもそも在来の要素がなく、土師器や末期古墳を在来の民の技術をもとに作ることはできない。図5・6に示したように、北海道には在来の人々が常におり、南の文化を受容したと説明することができるが、東北北部には6世紀に人々が住んでいた痕跡がなく、7世紀以降の居住者は南北どちらかから移住してきたことになる。八木が在来の要素が加えられたと理解した土師器や末期古墳の諸属性は、別の解釈をすべきだということになる。

実際、移住者の立場に立てば、その契機や理由は多様であり、集団の構成者も人々の技量も様々で、誰もがすべての生活技術を一定の水準で持ち合わせていたとは限らない。遠い地域への移住ということでそれを機に独立した若者が多く含まれた集団だった場合、製作技法や細かな形態が移住元とまったく同じにならないのは当然であろう。むしろ、どこかで一度製作されたことがあるものが正確に再現されるという例は、移住元が、火山噴火等の土地を奪われてしまうような自然災害に遭遇し、全集落あがりの移住だった等、特別な例を示すであろうし、そういう場合、構成者の体力差が大きく、それを考えてもそれほど遠くには移動できない。

このように移住にはその背景が様々ありうる。そういった場面では、土器や墓の形態・製作技術のようにその時々個々の歴史事象による変化の余地のある属性を単体で取り上げるのではなく、図5・6で扱ったように集落の全文化要素のなかで見るべきである。ただし、解釈の余地なく移住があったことを示す物理的な属性もある。人口の極端な急増である（松本2020）。また、簡単には学べない・学ばない内容であるがゆえに東北北部に移住があったと考えられる属性もある。次にそれら2点を解説し、東北北部の人々の言語共同体を再度検討して

考察を終わりとする。

【移住を示す属性1：人口の急増】本稿第4節（1）で見たように、東北北部東側の7世紀後半の集落数は、前の半世紀の4倍以上に急増した。東北北部の西側では8世紀と9世紀後半にそのような集落の急増があった。集落数の増加は人口増加でもあるので⁴⁾、日本列島上での過去の人口増加の様子を見ると、半世紀で2倍以上に増えるのは、農耕が定着することによる自然増加では起こり得ず、移住以外にない（松本2020）。また本稿第5節（2）で考察したように、5世紀前半まで東北北部の居住者は北海道の住民と同じ言語共同体を形成し、採集・狩猟の生活だった。採集・狩猟民社会では人口がほとんど増加しない（木下2003）。そんな人々が、自分たちだけで人口増加社会の文化のすべての要素をいきなり取り入れようとするだろうか。しかも、もともと言語共同体が別で、言葉も通じない地域の文化である。その1例を次に考える。

【移住を示す属性2：理由なく学ばない・学べない文化複合と技術】

7世紀に東北北部の東側に住んだ人々は馬を飼っていた。だが、定期的に重い荷物を遠方に運ばねばならない、馬を育てて提供することを生業とするといった社会的理由なしには馬を飼う必要はない。しかも馬の飼育・調教には様々な知識、熟練した技術、特殊な道具がいるし、馬を複数頭飼うには広い牧場も、それを維持する火入れなどの専門的技術もいる。

これら2つの属性は集団の移住以外には起こり得ない。7世紀の東北北部でおこった移住は、馬の飼育で象徴される新来の異文化を運んだのであり、馬飼地域の言語共同体が拡散したことを意味する。この時期の日本列島上にあった馬飼技術を持つ文化は終末期古墳文化である。日本語古語を話す人々の文化である。東北北部の東側に7世紀に定着したのは、日本語古語の言語共同体であった。7世紀の東北北部の人々は古代日本国域からの移住者であり、続縄文時代以来の在来アイヌ語古語を話す人々をエミシと呼ぶのであれば、エミシではなかったことになる。

一方、北海道にはアイヌ語古語が話される別の言語共同体があった。『日本書紀』斉明天皇5年（659）の条に、中国皇帝に古代日本国と朝貢関係にあったエミシを紹介した記事があり、中国に対し東夷である古代日本国がさらに東の異民族を紹介した「重訳」だったと理解されている（河内2013）。言葉が違っていたのである。皇帝はエミシの容貌が遣唐使や自分たちと違うことにも驚いた。紹介されたのは日本国に最も近い地域のエミシだった。当時、最も近い異言語の民は北海道にいた。7世紀の北海道在住のエミシがアイヌ民族の祖先にあたるのは間違いない。

6. まとめと今後の展望

人間は言語共同体を形成して生活している。これは人類普遍の現象である。そこに着目し、その概念を用いて、考古学資料をもとに東北北部と北海道南部の古代の人々の言語共同体を考えた。東北北部の人々は5世紀前半までは北海道の人々と同じ言語共同体を形成していたが、7世紀以降には古代日本国域の人々が移住してきて東北北部は日本語古語を話す人々の言語共同体に属ようになった。これは筆者がこれまでに述べてきたことと同じではあるが、集落と

は言語共同体としての側面を持ち、同一文化要素を持つ集落の拡散は言語共同体の拡散でもある。

様々な時代・地域で起こった人間にかかわる出来事を読み取り物語るのが考古学である。しかし扱える資料の大部分は物質文化や自然である。そういった「モノ」と「モノ」との間にあった人間活動を読み取るためには、人間とは何かを考え、ある条件下でどのような活動をしてしまう存在なのかを知る必要がある。例えば明治期の北海道への移住者には、仙台藩亶理郡の領主、伊達邦成らによる伊達市への移住、近代日本国の政策により北海道各地を広く開拓した屯田兵の移住、一般の開拓者による移住があり、それぞれ持ち物の種類、質、量に違いがある。また、水産業、畑作、水稲耕作、牧畜等、何を生業にするかで、選ぶ土地の条件が違ってくる。移住者が誰で、どのような能力の持ち主だったかとも関わる内容である。

今後、今述べた視点で北海道への近代の移住についての考古学研究をおこない、それを参考に、古代の東北北部の移住について、集落の立地条件、黒ボク土等の遺跡の土壌の変化なども検討しながら、活動内容をさらに具体的に考察する予定である。

註1：言語共同体の英語表記はSpeech community やlinguistic community、ドイツ語ではSprachgemeinschaftである。日本語訳には言語社会もある(亀井他1996)。本稿ではより使用頻度の高い「言語共同体」を使う。

註2：1913年のソシュール死後1938年に改正されたスイス連邦憲法では、ドイツ語、フランス語、イタリア語、レトロマンシュ語を国語とし、ドイツ語、フランス語、イタリア語を公用語とした。1996年の改正で、ロマンシュ語の話者との交流においてはロマンシュ語も連邦の公用語であると加えられた(高橋2009)。

註3：ただし誤解が生じることがないように、次のことを強調しておく。第2節(1)でも記したが、「一つの言語共同体」と言っても、その共通した言語の範疇は「専門用語」「世代の用語」「方言」「移民の出身国の言語」「母語」など、様々に括ることができる。その物質文化の共通の組み合わせを持つ社会が「一つの言語共同体」だとして、例えば「方言」や「母語」といった人々の言葉の共通性の括りの範疇についてはその都度丁寧に考察する必要がある。

註4：畑地や牧地をある程度固定した社会の場合、集落の増加を人口増加と一応は読み取れる。

引用参考文献

- 青森県市編さん古代部会 2008『青森県史資料編古代2 出土文字資料』青森県
青森市教育委員会 2013『石江遺跡群発掘調査報告書VI』青森市埋蔵文化財調査報告書第113集
E.Tylor 1871 *Primitive Culture*, Brentano's Publishers, New York
海保峰夫 1987『中世の蝦夷地』吉川弘文館
風間喜代三・上野喜道・松村一登・町田 健 2004『言語学 第2版』東京大学出版会
亀井 孝・河野六郎・千野栄一編著 1996『言語学大辞典 第6巻 述語編』三省堂
岸本直文 2014「倭における国家形成と古墳時代開始のプロセス」『国立歴史民俗博物館研究

- 報告』369-403頁 第185集
- 木下太志 2003「第1章 狩猟採集社会の人口」『人類史のなかの人口と家族』1-22頁 晃洋書房
- 金田一京助 1951「えみし（蝦夷）の国」『国学院雑誌』52巻1号〔『金田一京助全集6 アイヌ語Ⅱ』所収 300-314頁〕三省堂
- 工藤雅樹 2000『古代蝦夷』吉川弘文館
- 熊谷公男 2013「古代蝦夷論の再構築に向けて」『歴史と文化』1-20頁 50号 東北学院大学
- 河内春人 2013『東アジア交流史のなかの遣唐使』汲古書院
- C.レンフルー 1987〔橋本楨矩訳1993〕『ことばの考古学』青土社
- 佐久間 淳一 2013『本当によくわかる言語学』日本実業出版社
- 庄司博史 1997「民族境界としての言語」『民族の生成と論理 岩波講座文化人類学 第5巻』67-96頁 岩波書店
- 瀬川拓郎 2015『アイヌ学入門』講談社現代新書
- 高橋秀彰 2009「スイス連邦の公用語と国語—史的背景と憲法上の言語規定—」『関西大学外国語学部紀要』27-40頁 創刊号
- 田中克彦 1975『言語の思想—国家と民族のことば』NHKブックス
- 田中克彦 1978『言語からみた民族と国家』岩波現代選書
- 田中春美・田中幸子 2015『よくわかる社会言語学』ミネルヴァ書房
- 千歳市教育委員会 1985『末広遺跡における考古学的調査（続）』千歳市文化財調査報告書XI
- D.ブリケル 2005〔平田隆一監修・斎藤かぐみ訳2009〕『エトルリア人—ローマの先住民族 起源・文明・言語』白水社 文庫クセジュ
- 八戸市遺跡調査会 2001『田向冷水遺跡Ⅰ』八戸市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書第1集
- 八戸市教育委員会 2006『田向冷水遺跡Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第113集
- B.ジョルダン 2008〔山本敏充監修 林 昌宏 2013〕『人種は存在しない 人種問題と遺伝学』中央公論新社
- P.ベルウッド 2005〔長田俊樹・佐藤洋一郎監訳2008〕『農耕起源の人類史』京都大学学術出版会
- F.D.ソシュール 1916〔小林英夫訳1970〕『一般言語学講義』岩波書店
- F.D.ソシュール 1916〔町田 健訳2016〕『新訳ソシュール一般言語学講義』研究社
- F.D.ソシュール 1916〔tr. W. Baskin 1959〕*Course in General Linguistics*, Philosophical Library, New York
- 北海道埋蔵文化財センター 2002『恵庭市西島松5遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第178集
- 増本浩子 2010「スイスにおける多言語・多文化主義」『神戸大学文学部紀要』17-33頁 37号

松本建速

松本建速 2006『蝦夷の考古学』同成社

松本建速 2013「東北北部にアイヌ語系地名を残したのは誰か」『考古学研究』55-75頁
60巻1号 考古学研究会

松本建速 2015「考古学からみた古代の東北北部域の言語」『岩手史学研究』61-85頁 96
号 岩手史学会

松本建速 2018『つくられたエミシ』同成社

松本建速 2020「エミシの言葉と考古学—人口非増加社会から人口増加社会への変化—」『世界と日本の考古学 オリーブの林と赤い大地』457-477頁 常木晃先生退職記念論文集
六一書房

八木光則 2011「古代北日本における移住・移民」『海峡と古代蝦夷』215-235頁 高志書
院

矢嶋仁吉 1957『集落地理学』古今書院

山田秀三 1982『アイヌ語地名の研究 I 山田秀三著作集』草風館

R. バーリング 1970〔高原侑・本名信行訳1974〕『言語と文化』ミネルヴァ書房